

## 論文の内容の要旨

論文題目 最蓮房宛て『諸法実相鈔』の総合的研究

氏名 ジッリオ エマヌエーレ ダヴィデ

本論文は論文編（序論・本論・結論）と資料編の二つに大別される。「本論」は更に「第一部 歴史・書誌学的研究」と「第二部 思想史的研究」に分けられ、「資料編」は写本十点の翻刻と写真版から構成される。

**序論第一節「問題の所在」** 『諸法実相鈔』（以下「実相鈔」）の特徴を述べ、本研究の必要性を示し、本論文の構成と見通しを紹介する。「実相鈔」是最蓮房宛て遺文の一つであり、日蓮（一二二二～一二八二）が佐渡流刑中（一二七三）の際に京都出身の元天台僧・最蓮房に宛てたと伝えられ、日蓮真筆（真蹟）は残らず、後代の写しでしか伝わらないため、真偽未決で従来は「写本遺文」に入る。前半には「凡夫は本仏、釈迦等の諸仏は迹仏」という、他のどの遺文にも表れない教説（凡夫本仏説）があるため、日蓮没後の偽作の可能性があるとされた。本抄に対する注釈書は未発見で、総合的な研究もない。

**第二節** 先行研究を概観するが、研究がほぼなされていない理由を明確にし、戦後からの考察の方向性と限界を指摘する。

**第三節** 本研究はこれまでの日蓮研究と各教団の解釈を継承し、他方では超えようとするもので、戦後の考察に対する位置づけを示し、どのような方法論を選ぶかを述べる。また、「実相鈔」について新たな視点を加えると共に広く写本遺文の研究方法を確立させることを目的とすると言及する。

**第一部第一章** 遺文集の集成事情と最蓮房伝から、「実相鈔」の来歴を調べ、次の点を明らかにする。一、京都に帰った後の最蓮房の動きは不明。二、その実在も実証されていない。三、最蓮房宛て遺文は皆元々京都にあった可能性が高い。身延山久遠寺十一世日朝の「録内御書」（以下『朝内』、一四七九年頃）は、最蓮房宛て遺文として「立正観鈔」「立正観鈔送状」「当体義鈔」を収めるが、「実相鈔」を初めて収録したのは日朝の「録外御書」（以下『朝外』、一四八〇年頃）である。『朝内』と『朝外』の基となった資料はそれぞれ、十四世紀前半の身延三世日進が身延に持参し、日朝の弟子・日意が一四七九年に京都において写し身延に届けた可能性が高い。だが、日進が持参した最蓮房宛て遺文は「立正観鈔」関係しか無く、日意の「録外」には最蓮房宛て遺文は無い。この段階では、「立正観鈔」関係以外はみな後代の弟子たちによる偽作か、真蹟が失われたか、としか言えない。ここで、「実相鈔」の原型と伝承を明確にする書誌学的研究と、「実相鈔」の教説の成立年代を想定する思想史的研究とを行う必要性を指摘する。

**第二章** 「実相鈔」の現存する最古版を『朝外』に見出した成果を紹介し、「実相鈔」を三つの版、即ち『朝外』所収版と江戸期の刊本二点を比較し検討する。そこで、「実相鈔」は蒐集によって内容が変わり、刊本では削除と付加が豊かである事を述べる。「実相

鈔」は日蓮にあったはずがない凡夫本仏説を述べていると見て、偽作の可能性があると疑う際に最も取り上げられる「凡夫は本仏、仏は迹仏」との文章も、刊本に初めて付加された可能性が高い事も明らかにする。但し、元々『朝外』に問題があり、その底本となった資料を日朝が写した際に省略された可能性も否定できない。不明点を明らかにすべく、日朝の書写における忠実性を確認する必要性を指摘し、次章に移る。

**第三章** 日蓮遺文には日朝の「録内」と「録外」という、違う時代と場所で行われた蒐集にも拘わらず共通して収録される遺文（共通遺文と仮に命名）が存在する。そこで、共通遺文と位置づけられる真蹟遺文を一点、取り上げ、原版（日蓮の真蹟）と江戸期前の写本四点、江戸期の京都の刊本一点を比較する。その時、日朝の時代の蒐集者はみな原版を直接には確認できず、それを書写したものと種々の異本も参考にしたため、それぞれ各様に原版を想定しようとした可能性が高く、底本だったものをただ忠実に写すことが唯一の基準ではなかったことを述べる。刊本類のほうが最も補いが多く、室町期の身延の日朝の書写よりも刊本類のほうに問題が多かったと考えてよい事を確認する。但し、他の共通遺文で研究すれば結果が変わる事もありうる。真蹟が残らない写本遺文の場合は書誌学的に他にも多くの不明点が残ることを指摘し、「実相鈔」とより深く関わっている根拠を提供する必要性を強調する。

**第四章** 身延文庫蔵の日宣述『諸法實相傳抄』（以下『実相伝抄』）という口伝を考察する。日宣は日朝時代の身延山に居たマイナーな僧侶の可能性が高い。『実相伝抄』所伝の口決の思想は十五段落に分けられ、その基本的な解釈態度は「実相鈔」前半と共通する。その奥書によれば、『実相伝抄』は京都妙覚寺三世日源（十五世紀前半）が関東の中山法華経寺の日実（日朝の先輩に当たる人物）に書物で伝えた本尊相伝であり、日宣の師匠が中山の日実から口頭で教えてもらったものである。また、この口伝に関して「録外」に最蓮房宛て「諸法実相鈔」という御書があり、しかしそれはまだ関東地方にはなく一京都にある一と日宣の師匠が日実から聞いたと言う。要するに、「実相鈔」は『朝外』の前にも京都のほうで存在していると関東で言われ、一四五〇年前後の中山を通して伝わった本尊相伝の、権威のある関連文献として身延に初めて知られた。更に、日宣は『朝外』が出来上がる前の話をしているので、『実相伝抄』は一四七〇年代迄には成立した史料だと推定できる。第一章で想定していた可能性、即ち同年代の日意が「実相鈔」の書写本を身延に届けた可能性は更に高まる。最後に、日宣筆『実相伝抄』と「実相鈔」前半と同様な経文を同様な用語で注釈するものが、京都の日源に当てられた注釈、身延の日朝と、同時代の関東の注釈者に初めて顕著になった事を示す。日朝の師僧と日朝自身と日意が当時の関東天台談義所と交流が深かった背景もあり、当時の中山と身延と関東天台宗とには共通の関心と注釈があった可能性が高い。ここで、「実相鈔」の成立に関して、一）中山・身延と関東天台とには、先に同様な知識と関心があって、後にその影響下で京都と中山の間で「実相鈔」が成立したか、二）中山を通して『実相伝抄』等の本尊相伝と「実相鈔」の写しが身延に届いた結果、これが逆に関東天台を刺激し中山と身延と共通の関心と注釈をもたらしたか、の二つの可能性に絞れた。「実相鈔」前半と同様な教説を含む天台の注釈書が在ったとすれば、どの時代のどの地域で初めて現れたかによって、上記の可能性の内の一つに更に絞れる事を指摘した。

**第二部第一章** 写本遺文の思想史的研究の方法を設定し、日蓮遺文をどのような主体性で考えるべきかについて述べる。

**第二章** 写本遺文の大きな特徴を明らかにし、読み方によって真蹟遺文の内容と矛盾しない読み方も可能だが、この試みには大きな限界もあると述べる。それは真蹟遺文から捉えられる日蓮の本来の思想に矛盾しないため真作らしいと考えることもできるが、一方で真作に見えるように巧みに偽撰された事も有り得る。その時、日蓮の著作かどうか真偽不明のままで、むしろ真蹟遺文のどれかに「似ている」と言える箇所注目する事こそ、上記の二重の可能性に導きやすいという限界を示す。具体的な例として「実相鈔」後半の二箇所を検討し、その次に前半の独自の教説を中心に考察を進める必要性を指摘する。

**第三章** 「実相鈔」前半の独自の本仏義を考察する。それは、法華経本門の「如来秘密」「神通之力」の経文をそれぞれ「体の三身」と「用の三身」の用語で注釈した上、同経迹門だった「諸法の実相」を今度は「諸法即ち実相」に読み直し、「俱体俱用の三身」説によって注釈するものである。中でも、如来秘密＝体の三身＝妙法蓮華経の五字＝実相＝凡夫＝本仏（本体のみの仏）、神通之力＝用の三身＝釈迦等の諸仏＝諸法＝迹仏（作用のみの仏）とし、本門の久遠の仏とは我等が妙法五字を受持する所において作り顕されていくもので、体と用とが合わさった俱体俱用の三身であるとする。更にこれを「諸法（用）即ち実相（体）」の意味なのだと述べる。「実相鈔」前半の注釈は凡夫を仏よりも上位に置くような「凡夫本主説」ではあり得ず、その本仏義は「実相鈔」独自のものである。日蓮宗の中でも凡夫と仏との距離が縮まっていく展開の中、我等を本門の仏と同一視する「当体義抄」よりも「実相鈔」前半は未発展の段階を示し、思想史上の成立はより早かった可能性もある。しかし、「実相鈔」前半と同様な注釈を含む、十五世紀後半の日蓮教団の注釈において他の最蓮房宛て遺文は引用されるが、「実相鈔」だけは引用されない。よって「実相鈔」の成立のほうより遅かった可能性もある事を示す。

**第四章** 叡山遊学期の日蓮の師に当たる俊範との関係を通して十三世紀前半の天台教学を調べる。「当体義抄」と同様な、凡夫の有りの僅を肯定する注釈が日蓮当時に既に存在したが、「実相鈔」前半と同様な経文を同様な用語で注釈する天台の注釈書は見当たらなかった。

**第五章** 最後に、その注釈が日朝と日意に影響を及ぼせる時点に現れたかどうかを検討する。当時の関東天台談義所と親しい関係にあった尊舜の『文句略大綱私見聞』巻五中の口伝が該当したが、「実相鈔」の収録より十数年後の史料である。よって、中山を通して『実相伝抄』等の本尊相伝と「実相鈔」の写しが身延に届いた結果、これが逆に関東天台を刺激し中山と身延と共通の関心と注釈をもたらした可能性のほうが高い。同時に、一四七〇年代迄の京都と中山の日蓮教団の関心の中で「実相鈔」が成立した可能性も否定できないことを示した。

**結論** 書誌学的、思想史的研究を通して明らかになった点を纏め、「実相鈔」の真偽は未決であるが一四七〇年代迄には成立していて、その鍵に中山が存在すると推定した。